

景観フォーラム

巻頭言

耳にうるさく響いていたあの蝉の鳴き声も消え、秋が深まりつつある今日この頃です。9月という月は驚くべき事件が起きた月でもあります。日本では1923年9月1日は関東大震災が起きております。1939年9月1日にはヒトラーがポーランド侵攻を命じ、実質的に第二次世界大戦がはじまりました。そして、多くの人々を極限状況に巻き込んだ悲慘な世界大戦も終わり、1951年9月8日、戦争に負けた日本はサンフランシスコ平和条約に調印し長い占領期間が終わり主権国家として独立を回復しました。そして50年後の2001年9月11日は9.11と称される米国での同時多発テロが起き、ビルに旅客機が突っ込むという普通では経験することのない光景が目の前で起きていることに信じがたい気持ちを起こさせるものでした。3000人弱の一般の人々があの事件の中で瞬時に亡くなったという記憶も何か異常な思い出となっております。そして、事件の首謀者がオサマ・ラビンというアラブ人であるとされておりますが、何かすっきりしないものを感じざるを得ません。現代史に残る大事件にもかかわらず、その原因については、それで本当なの？という気持ちになるのは私一人ではないでしょうか。

大事件というものに遭遇すると、何かそれに伴う光景というものが記憶として残されます。私たちは日常生活の中でいろいろな風景なり景色というものを体験しております。その中でも、幼い時に体験した原風景たるものは皆それぞれ持ち合わせております。その原風景が何であるかを問うことが、もしかしたら景観を研究する際に大事なきっかけになるかもしれません。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2021 年度年間スケジュール>

*2021 年度とは 2021 年 4 月 1 日⇒2022 年 3 月 31 日のことです。

2021 年

- 4月20日(火) 於ネット会議 **第1回景観研究会** (コロナ禍の景観1)
- 5月25日(火) 於ネット会議 **第2回景観研究会** (コロナ禍の景観2)
- 6月29日(火) 第1回理事会 於ネット会議 **第3回景観研究会** (コロナ禍の景観3)
- 7月31日(土) **第1回景観まちあるき** (企画中)
- 8月 夏休み(景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
- 9月27日(月) **第4回景観研究会** 於ネット会議 (コロナ禍の景観4)
- 10月23日(土) **第2回景観まちあるき** (等々力溪谷～田園調布 11:00 等々力駅集合)
- 10月26日(火) 於ネット会議 16:30～
- 11月27日(土) 江戸東京建物館 見学 ※JR 武蔵小金井駅～バス
- 12月18日(土) **第3回景観まちあるき** 野田(千葉県) ※現地で第2回理事会と忘年会を予定

2022 年

- 1月22日(土) **第4回景観まちあるき** (企画中)
- 1月25日(火) 於ネット会議 16:30～
- 2月17日(木) **第5回景観研究会** : 於 JICA 研究所
- 3月26日(土) **第5回景観まちあるき** (企画中)

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

結城まちある記

野田路人

コロナの緊急事態宣言中ではありますが、8月28日の土曜日に、茨城県の結城の町を歩いて来ました。交通機関は本来、JR 宇都宮線の小山で水戸線に乗換え、上野から約1時間半ですが、今回はコロナ対応を考慮して、現地まで車を使い移動しました。

< 結城の概要 >

県の西部に位置し、ほとんどが平坦な土地で、北側、西側は栃木県です。東は鬼怒川によって、筑西市と隔てられており、独自の発展を遂げました。結城紬や桐たんすなど独特の伝統工芸品が有名で、結城紬は、2010年にユネスコの無形文化遺産に登録され国内外に結城市の名を広めています。また、平地林を開いた田畑では、白菜やレタス等農作物の生産に恵まれ、関東でも有数の歴史を誇る城下町で、今も中世城下町の実原をとどめ、神社や仏閣が集中し、見世蔵など歴史的な蔵造りの街並みは、貴重な文化遺産です。

< 結城の歴史 >

結城市は奈良時代頃から結城紬の特産地として発展してきました。鎌倉時代には小山氏から分かれた結城朝光が館を構え、以後、鎌倉以来の名家結城氏(関八家)の城下町となりました。元禄13年(1700年)、水野家宗家筋の水野勝長が能登より1万8,000石で封じられ、以後明治維新まで結城藩水野氏10代がこの地を治めました。結城は江戸経済の大動脈である鬼怒川の要衝にあり、結城紬をはじめ、農産物の集散地として隆盛を極めました。

明治時代、結城は養蚕の村、紬の町として歩み始めます。当時は、紬、桐製品、かんぴょう、皮靴などの産業が盛んで、市街地には問屋が並び、現在も30を超える蔵造の家が紬問屋街を中心に残っています。1954年、1町4か村が合併し、結城市が誕生しました。

見世蔵めぐりコース [約3.5km | 約1時間]

明治から大正期に建築された見世蔵など、
蔵造りの建物を見ながら街並みを楽しむコースです。

- ① 結城駅
▼400m
- ② 磯田邸
▼50m
- ③ 喫茶カデノキ
▼150m
- ④ 小西金物店
▼100m
- ⑤ 桜井長太郎商店
▼50m
- ⑥ 旧鈴木新平商店
▼100m
- ⑦ 旧須関商店
▼120m
- ⑧ 奥順
▼30m
- ⑨ 旧キヌヤ薬舗店舗
▼30m
- ⑩ 結城蔵美術館
▼100m
- ⑪ ばんやムムス
▼350m
- ⑫ 旧奥庄
▼50m
- ⑬ 旧結真紬
▼300m
- ⑭ 結城酒造
▼200m
- ⑮ 武勇
▼200m
- ⑯ 秋葉栴味噌醸造
▼500m
- ⑰ 結城駅



●結城酒造

鎌倉時代より結城氏初代朝光の城下町として栄え、酒造りも盛んに行われてきた。浦里家は、1859年(安政6年)の酒造鑑札を保管しており、安政蔵は酒造業を始めた安政年間の建築と考えられ、1854 - 1860年頃(安政年間に創業。「結(ゆい)」、「富久福(ふくふく)」ブランドの日本酒を醸造販売する老舗酒造メーカー。

建物は江戸末期～明治時代で【登録文化財】結城酒造株式会社安政蔵、結城酒造株式会社新蔵、結城酒造株式会社煉瓦煙突造り酒屋店舗及び醸造蔵として利用されています。



入口



煙突



酒造りは冬の為、今は何も作っておらず、ご厚意で醸造所内の奥まで見学させて頂きました。



出来たお酒を大きな冷蔵庫で保管され、店頭で販売しており、記念にお薦めを購入して来ました。

●結城つむぎ館

結城紬のミュージアムとして平成18年にオープン。長年問屋として商いをしてきた奥順（株）が、創業100周年を記念して、より多くの方に結城紬を知ってもらいたいという想いから作った施設。施設内には資料館、反物の展示館、結城紬製品のショップや染織体験工房があり、季節によって「浴衣染め体験」「着付け体験」「ひなまつり」「新作結城紬の展示会」などの企画も実施しています。



- | | |
|-----------|--|
| 1 古民家 陳列館 | 常時200点以上の結城紬を展示 |
| 2 結の見世 | 組合室内
YUKI OKUJUN・オリジナル製品ショップ |
| 3 織場館 | 染め織り体験 |
| 4 資料館 | 本場結城紬 染織資料館「手織屋」 |
| 5 老の蔵 | ギャラリー&カフェ「老の蔵」
〈現在お休みしています〉
明治初期建造 国の登録有形文化財 |
| 6 奥順 店舗 | 大正初期建造 国の登録有形文化財 |
| 7 離れ | 明治19年建造 国の登録有形文化財 |
| 8 土蔵 | 明治37年建造 国の登録有形文化財 |
| 9 結城澤屋 | 明治19年建造 国の登録有形文化財
結城紬の専門店「武ノ蔵」を改装 |



●奥順

建物：明治19年 【登録文化財】奥順見世蔵、奥順店舗、奥順土蔵
代々、結城紬の問屋店舗兼住宅として利用されています。



●結真紬

建築：明治40年頃 【登録文化財】結真紬見世蔵、結真呉服店を経て、結城紬の間屋店舗兼住宅に利用



●結城蔵美術館

建築：明治中期頃 歴史・文化の資料を公開
新たな芸術文化を発信中



●小西金物店

建築：明治初期 【登録文化財】小西見世蔵
銅鉄店を経て、建材関係事務所兼住宅として利用



●武勇

建築：江戸末期 代々、造り酒屋店舗及び醸造蔵として利用されています。



●旧黒川米店

建築：明治45年 【登録文化財】旧黒川米穀店店舗
当時の米穀商店舗を現在パン屋として使用



●築嶋邸

建築年代：明治13年
当時は穀物商店舗、現在は住宅として利用



●その他まちに点在する蔵づくり

大通り沿いを中心に営業を続ける店舗や住宅として使用しているものなど様々です。



売物件の看板が出ている物や、裏通りでは、瓦も落ちかけ、かなり痛み出している蔵も見かけました。



●市役所前



●結城小学校前





市役所～結城小学校付近にかけ城下町の雰囲気を取り上げる為、築地塀や石積みが復元されています。

●JR 結城駅周辺

蔵造りが残る城下町の玄関口とは思えない近代的な景観の駅周辺は、結城市は令和2年～令和6年で約300ヘクタールを【結城駅周辺地区】都市再生整備計画事業として進行中、HPによると『本地区はJR結城駅を中心として、北部は城下町の面影を残す街並み、南部は新しい街並みを形成していますが、高齢化や人口減少により街の空洞化が進み、かつての街の賑わいは息をひそめています。このことから、駅自由通路のバリアフリー化をはじめ、周辺環境の整備を行うことで、だれもが安全・安心・快適に駅の南北を行き来できるようにし、歴史的建築物が残る北部地区と文化センターや公園など公共施設や商業施設の存する南部との交流を図るとともに、北部において新たな防災拠点を整備することで、安心して過ごせる快適で魅力的な街づくりを目指し、都市再生整備計画を作成いたしました。』とあります。



JR 結城駅



市民情報センタービル内の物産センタ



駅前ロータリー



駅前：市民情報センタービル

今回、古くから残る蔵や街並みを見た後に、駅前で駅ビル、ロータリー、市民情報センタービル（駅前ビル）に、図書館・物産センター・子育て支援センター・多目的ホール・IT研究室、天体ドームなどが集約して入居）の近代的な景観を見ました。行政主導のもと、古い町並みの保存復元、観光資源の開発、地場産業の継続・育成と並行して生活者の快適で魅力ある街づくりが、この様に街の姿(景観)を変えていく実例を見た気がしました。

犬山市に「観光旅行」(上) 犬山城と城下町 過去とが現在が交差する人気スポット

豊村泰彦

2度目のコロナワクチン接種を終えてから2週間経った7月半ば、愛知県犬山市に観光で行ってきた。犬山市には国宝となっている犬山城や数々の歴史建築遺産を移築した「明治村」博物館があり、接種を終えたらその勢いに乗って犬山市を訪問してみようと考えていたのだ。しかし、東京ではまだ感染者が下げ止まりし、愛知県でも蔓延防止措置が解除になったばかりという状況下での遠出は多少不安もあったが、その後デルタ株による記録的急増期に移行していったことを考えると、つくづくいい時期に旅行したものだと思う。

さて今回は犬山城と明治村の2か所を2日で観光したが、双方とも景観的にみて内容が豊富で、それを一度に放出というのではもったいなくもあり、今回は犬山城とその城下町を紹介し、明治村は次回に回すことにする。



■城めぐりがブーム

城めぐりがブームになっているという。特に最近は若い女性に人気があるようで「城ガール」などと呼ばれるらしい。では、彼女らはそのどこに惹かれるのか、形なのか歴史なのか。城は全国至る所にあるが、形状や構造、建てられた時期において一つ一つ異なり、見れば見るほど知れば知るほどその美しさ、神秘性に心打たれる。そのような魅力ある城の現物をじっくり観察し、ご当地グルメもしっかり味わって帰って来ようというのが彼女らのもくろみかもしれない。

しかし、数多くある全国の城の中でどこに目を付けたらよいのか。城は形状だけみると一見みな似ているような気がする。やはり、城の違いをはっきり認識しているかしていないかで感じる興味の度合は断然違う。私などは今回視察した犬山城については単純に「美しい」と感じるものの、「どういうところが？」と理由を聞かれると返答に困ってしまう。

そこでまず考えたいのは、城のタイプである。

日本の城は建てられた場所によって4つに分類される。山の上に築かれた城は山城、低い山や小高い丘のようなどころにある城は平山城、平地に建てられた城は平城、河川や海、湖などの水源のある場所にある城は水城というのだそう。では、犬山城はどうかというと、木曽川沿いの小高い丘の上にあるので平山城というわけだ。

城が建てられたのは1537年で、創建者は織田信長の叔父の織田信康。現存する木造天守としては日本最古となっているが、現在のような形に整えられたのは大改修が行われた江戸時代だという。この城は当時から注目されていたのであろう。白く美しい外観を眺めた儒学者の荻生徂徠が唐の詩人・李白の詩に登場する城にちなんで「白帝城」と名付けたことでもよくわかる。



■城の中へ

とまあ簡単に基礎知識を頭に収めておいて、いざ城に突入する。順番として三の丸から入って、二の丸、本丸と進んで天守に入るが、小高い山の上にある犬山城については、山の登り道をひたすら歩く。すると、城門があり、それを潜ると天守閣が姿を現す。「オー！」という感嘆の声が思わず漏れそうになってしまう。おそらく天守閣としては小振りかもしれないが美しさにおいては他に引けをとらないのではないか。

しかしさてよ、城の中心である天守閣に果たしてこんなに簡単に入れるものだろうか。城は城主が閉じこもる天守をまもるため簡単に進めないように幾重にも壁を築き門を建てることで敵の侵入を防いでいる。また、侵入者を見張るための櫓を周囲にまんべんなく配置する。迷宮の構造こそが生きた城の姿だと思っていたが、犬山城はそういうものは一切ない。ただ、天守閣がポンと建っているだけ。

もちろんこれは元々の姿ではない。江戸時代にはすべて備わっていたのである。城は江戸時代に入って激減した。徳川幕府が大名の居城以外に城を持つことを禁止したためで、このとき全国に3000くらいあった城が170くらいに減った。それが明治になり廃藩置県制度が敷かれると、城は軍用地として扱われ、要塞として利用価値がないとして「廃城」が通達され、多くの歴史遺産が葬り去られたのである。

犬山城は幸い天守閣は残ったが、城として重要な構造物である門、櫓は不要なものとして取り壊されてしまった。それでも、天守でさえ全国で12箇所しか残っていないことを考えるとありがたいことではないか、と言われればそれまでだが、複雑な気持ちである。

天守の内部は4階になっており、狭い階段とさらに狭くて急な梯子階段を登りきったところに天守の最上階がある。濃尾平野を一望できる最上階の回廊からは犬山城下の町並みや木曽川の雄大な流れが360度の大パノラマで見渡せるが、高所が苦手な方は少し恐怖を感じると思う。ちなみに私は多少膝が震えたが何とか一周し素晴らしい景色を堪能した。



■城下町へ

天守を下りて城下町をぶらぶらと歩くことにする。この犬山城は、城の背後を木曾川が流れ、さらに川と城の間は断崖絶壁なので、背後から攻められることはない。前面には町割りで整えられた城下町が広がるが、町の外周を木戸や堀、土塁などで取り囲む総構えになっていることで、防御構造はかなり優れていたようだ。そのため、犬山城の城下町は江戸時代の町割りがそのまま残り、当時の名残を見ることができる。

城を正面にして南北に通る本町通りを歩くと江戸時代のものと思われる歴史的建造物が立ち並んでいる。町家や山車を入れる蔵なども見え、まさに風情ある城下町の街並みである。しかも街並みを楽しむときに最も視界の邪魔になる電柱や電線がないので、良い雰囲気壊すことがない。

一方、飲食店や土産物屋カフェなどもところどころにあり観光客で賑わっている。「城ガール」をはじめ若い旅行者が増えてからいるであろうか、スイーツを売る店が目立つが、それもこの町の新たな魅力の一つなのだろう。

犬山城は、昨今の城ブームの影響を受けて8年間で、観光客数が50万人以上も増えたというデータもあるくらい今や人気の観光スポットとなっている。単に歴史的遺産という観光資源だけであつたらこれほど人は集まらなかったかもしれないが、伝統を守っていこうという地域住民総がかりのまちづくり姿勢が地域産業の発展を支えているように思う。半面観光地ではよくありがちな外部の大型チェーン店の参入などはまだ少ないようだ。グルメ、ファッションといった現代的な店も地元の住民がうまく城下町の伝統を保てるように工夫して取り入れているのであろう。しかし、油断はできない、城下町のすぐ外ではつい先月、超近代的な大型ホテルがオープンするなど伝統とは相いれない未来化の波がもうそこまで来ているのだ。歴史的財産の継承と経済発展、地場産業の育成と外部資本の参入。犬山という観光地が地域の魅力づくりにおいて、これら問題とどう向き合っていくか今後の犬山市に注目したい。

<LFJブックレビュー 73>

『街路樹が都市をつくる』 藤井栄次郎著

2019年4月刊 岩波書店

斉藤全彦

人類は類人猿を発祥とする動物であるゆえ、もともと森に棲んでいたはずである。即ち、森が人類の住処とすれば、それから数万年たって都市という文明を開発したとしても、都市を住居とした年数より森を住みかとした年数のほうが数倍、否、数十倍長いわけであるから、余程、森の方が気持ちが安らぎ、ゆったりするはずである。都市を住居とすることは人類が、文明を育み自然より人工的なものをより身近にするように仕向けてきたことを証明する。自然は全ての恵みの源であると同時に破壊をもたらす驚異的存在であったはずである。なるべくこの脅威を鎮めて恵みを享受できるように都市生活というものに移行してきたわけである。

この『街路樹が都市をつくる』を紐解く前に出会ったのが『街路樹は問いかける—温暖化に負けない緑>のインフラ』という岩波ブックレットであった。このブックレットでは、メルボルンのアーバンフォレスト戦略、樹木の「価値」を最大化するアメリカ、世界をリードするドイツ・ハンブルグの実践、フランス、パリ・ナント・リヨン三都市の持続可能な街づくり、として世界の代表的な街路樹の創造的取り組みを紹介して、では、日本の街路樹はなぜ「寂しい」のかと問いかけ、戦前に比較して戦後日本の行政の在り方の貧しさを指摘する。そして最後に、再生のための七つの提言を具体的に示している。

以上を基に、では東京という都市にどのようなしたら豊かな街路樹を創造できるだろうか、という問いに答えたのがこの『街路樹が都市をつくる』である。先ず、第1章街路樹と日本人では、日本の街路樹は明治維新と共に始まった近代化の施策の一つであったということである。江戸時代までの日本には、街路樹という概念はなく、一里塚毎に休憩所と大木があり、街路に連なる街路樹という風景は存在しなかった。現在でも日光街道に連なる木々は街路樹と言えなくもないが、街路、即ち人々が住んでいる町の生業の中にある街路樹という概念はなかったと言えよう。日本の街路樹の歴史は近代国家の設えとして、「日本で近代的な街路樹が最初に植えられたのは、1867年（慶応三年）横浜の馬車道」ということになる。街路樹としてはアオギリが2mほどの間隔で植栽されたという。そして、東京の街路樹としては「1873年（明治6年）銀座道りにクロマツとサクラが明治政府によって植栽されたことに始まる」とされる。そして、「生育がよくなかったようで、1880年にはシダレヤナギ」に植え替えられ、ヤマカエデも混植された」という。その景観は「洋風建築が建ち並んだ通りに日本的な街路樹が植栽されていた」と若干ちぐはぐな感を呈していたことだろう。

1919年に初めての道路交通法が交付され、交通機能中心の「道路」と公共インフラの配置場所並びに人々の生活を保護するための「街路」が明確に分別される。道路は「車道」と「歩道」に分けられ、その歩道に並木を植え「街路樹」が成立することになる。私たちの街路樹はやっと100年になる若い歴史であり、これからどのようにしたら豊かな街路樹に育て上げるかは私たちの双肩にかかっているということになる。（斉藤全彦）



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

